

BCS

PRIZE-WINNING WORKS



BCS賞受賞作品探訪記

20

第四一回受賞作品（二〇〇〇年）

北九州市立 松本清張記念館

前編

一九九八年八月、北九州市の文化施設として作家・松本清張の記念館が小倉にオープンした。訪れる人は、誰もが清張の多面的な業績と、エネルギーシユな人物像に触れて驚きを新たにしている。前編は、さまざまな関係者の情熱によって、「清張らしさ」を宿す建築が誕生した経緯を紹介しよう。

清張の故郷・小倉のシンボルに寄り添う記念館

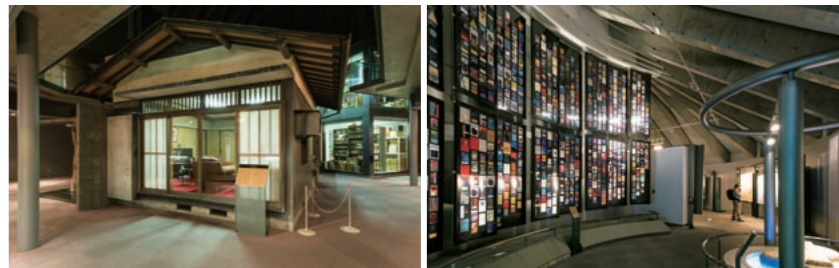
北九州市小倉は、松本清張が一九五三年、四四歳のときに『或る「小倉日記」伝』で芥川賞を受賞し、創作活動の場を東京へ移すまで、半生を過ごした町である。町のシンボルは小倉城。城址公園には本丸が再建されており、松本清張記念館はその南西の角に建てられている。石垣を背にし、昔は水を湛えるお濠だった場所、町の大通りに面している。建物の印象は城内から近づくときと、大通り側を通るときで大きく異なる。大通りに沿って歩くと間近に目に

清張記念館の低層棟は平屋で、屋根に和瓦が葺かれている。左は、大通りの交差点に面してカーブしている部分。瓦の列を減らしながら棟まで葺かれている。



左が中央棟、正面が低層棟。小さくさりげないエントランスを入ると低層棟に続く。石垣横の階段を降りると、地階の庭へ。

映るのが低層棟の屋根瓦の連なりである。その向こうにはほっそりとしたドーム状の白い屋根を見せるのが中央棟だ。中央棟は三層で、石垣の上の勝山公園側から見るとお濠の中に半身を沈めるように計画されていることがわかる。町に対して低く構えながら、内に豊かなボリュームを抱き込むあり方に、思わずその懐に入ってみたくなくなる。設計は宮本忠長氏（宮本忠長建築設計事務所・当時所長）。八〇年代に着手された長野県小布施の町づくり事業で知られる建築家である。土地の歴史を読み、町並みに生かし、内部に現代の建築空間を調和させる修景の方法論が全国から注目されるなか、北九州市の建築関係者も小布施や、氏が設計した島根県・津和野の「森鷗外記念館」に共感し、清張記念館の設計



右/低層棟の内部は常設展示室1「松本清張の世界」。入り口に清張の単行本約700点の表紙がパネル展示されている。出版当時の貴重なデザインを見ることができる。

左/中央棟の常設展示室2「思索と創作の城」。1階は編集者や来客と面会した応接室が再現されている。家具、調度類は清張の遺品。

依頼へとつながった。

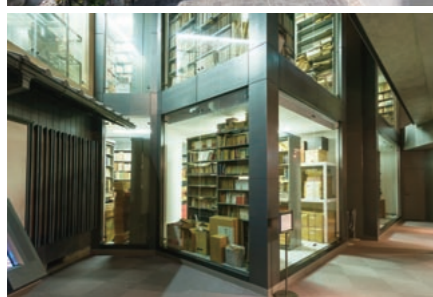
二つの棟を結び、作家の全体像を表現する

「低層棟は清張先生の業績を紹介する空間です。そこからブリッジを経て中央棟へ入りますが、これは作家の魂を包み込む空間です。内部に東京の自宅を再現し、書斎と書庫に蔵書がぎっしりと並んでいます」。宮本氏は設計当時を振

する。清張の創作活動の源泉ともいえる蔵書が一箇所に納まることの重要性を考えると、藤井氏は後に退けなくなったという。地元からも励まされ、「どうしたら来館者に松本清張の全体像を伝えられるか」というテーマに向き合う日々が始まった。

清張の創作へのエネルギーを来館者に伝える

プロジェクトは当初、建物と、展示企画の検討が別々に進められていた。宮本氏は建築で松本清張という文豪に迫ろうと思案し、藤井氏はアドバイザーとして、電通



上/左は低層棟、右は中央棟。二つの棟を結ぶブリッジで、シーンが切り替わる。下/再現された書庫。約三万点の蔵書や美術コレクションは、広範囲にわたる創作活動の源泉であった。

り返り、二つの棟に分けたことが、記念館を特徴づけたと語る。「このプランができたのは、館長とじっくりとお話をする機会に恵まれたおかげでした」。設計を大きく跳躍させたのは、後に館長に就いた藤井康栄氏との出会いだった。

藤井館長は文藝春秋で三〇年にわたって清張の担当編集者を務め、全集を編むなど作家の仕事に深く関わっていたことから、記念館の設立プロジェクトに当初から携わった。誘致建設委員会がつくられたのは一九九三年。その前段階で、清張が九二年八月に亡くなってほ

加していた。そうしたなかで、竣工もない森鷗外記念館の見学が行われた。その場で初めて藤井氏と宮本氏は顔を合わせた。藤井氏から伝わったのは、清張が持つエネルギーと迫力だった。「推理小説、古代史、昭和史など膨大な作品が華々しく世に出ましたが、それらを生み出す仕事場は『作家の戦場』です。静けさに包まれ、一人で長時間机に向かっている場所です」と藤井館長。清張の姿は宮本氏に奥深いインスピレーションを与え、建築に反映された。

低層棟から中央棟へ入ると、精神性のありかを感じさせるような暗転に包まれ、高さ一三層の大空間のなかに松本邸が立ちあがっている。それをデッキから眺める視点もあり、時を超えて作家の存在感がリアルに伝わってくる。全体のたたずまい、展示内容の充実、さらに地下階のオープンスペースの開かれ方などが、もう一度訪れたいという気持ちを抱かせる。記念館のもつ活気はそのまま、日々運営面で力をつくす人たちの活気に支えられているのだろう。

建築主より

作品として清張が蒔いた種が、大きく実るのはうれしいことです



北九州市立松本清張記念館館長
藤井康栄 Yasue Fujii

津和野で宮本先生に初めてお会いし、清張記念館の設計案を見せただいたときに、自分が記念館の仕事をする立場で感じていることをお話ししました。幸運な出会いでした。私は建築のグループの間ではありませんでしたが、勝手に抱いたイメージでも、宮本先生がふんわりとしたキャラクターで、聴かせて下さいという対し方をされると、お話ししようかという気持ちになるんです。「その場所です仕事をする人に話を聴く機会があるのは、とてもいいことで

」と喜んでくださって、津和野から北九州へ向かう列車の中でも延々と会話が続いていきました。いつでしたか、浜田山の松本邸にご案内し、書庫も見てくださいました。清張は書棚の間に置いた椅子に座って、夜中に資料を読むのを無上の楽しみにしていました。そんなことも宮本先生には伝わったと思います。

記念館のコンセプトはとても単純で「清張らしく」ということです。清張は天井知らずに前進あるのみの人でした。ですから、そのエネルギーを来館者に感じてもらえるようにしたいです。ここで働く学芸員たちも常に前を向いて仕事をすることが運命づけられているといえます。この一五年間、企画展を開き、研究誌を発行し、懸命に活動を続けてきました。とても清張のパワーと同じようにはいきませんが、その名に恥じないように、今後も続けたいと思います。

設計者より

清張先生の作品のように来館者の心に勇気をもたらしたい

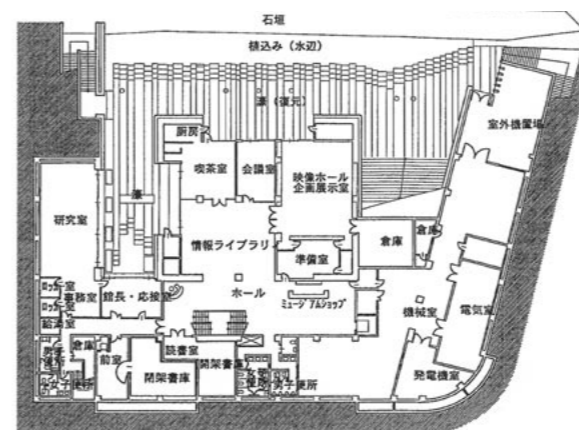


株式会社宮本忠長建築設計事務所会長
宮本忠長 Takahisa Miyamoto

かもしれないですが、城址の歴史的景観は変わりません。そこに調和するように、植樹帯に沿ってL字型の平屋建てを配し、和瓦の単純な大屋根を延ばして、中央の大空間の棟を囲んでいます。建築は虚飾や虚構のない、力強く平明な空間を目指しました。威張るところのない、穏やかな形にし、記憶に残る風景をつくらうと。

力強い文豪のイメージをお持ちだった松本清張先生の記念館を設計することになり、まずはその文学の世界を知ろうと清張全集を買い揃えて読み込んでいきました。全編読めたわけではありませんが見えてきたのは、「平明さ」というイメージです。先生の文章は、描かれた世界のなかにあたかも自分があるような平明さで迫ってきます。このイメージが記念館のデザインにも通じています。敷地の状況は、町の大通りから向こうの生活景観は変わっていく

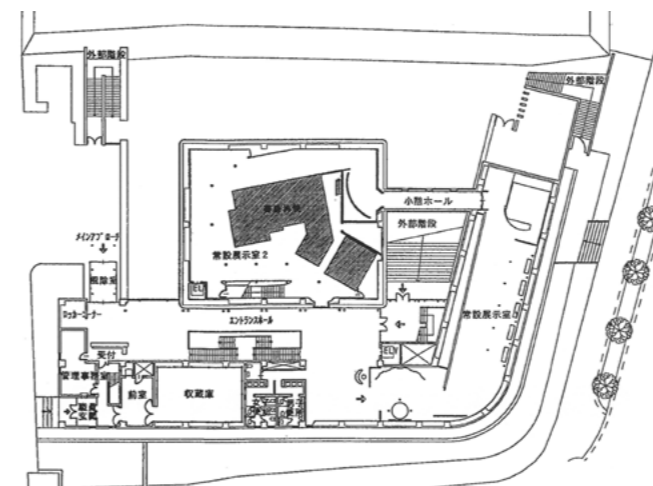
思い返すと、小布施の町づくりから津和野の森鷗外記念館の設計へつながり、それが松本清張記念館へとつながっています。さらに藤井館長をはじめ、多くの方々が話し合っ、協力し、完成させることができたんです。シンプルな空間ほど、ディテールは厳しくなりますから施工会社も苦労された部分がありました。清張先生の仕事はいろいろな人に影響を与えていることでしょうか。記念館の意義はこれからもっと大きくなっていくと私は思っています。



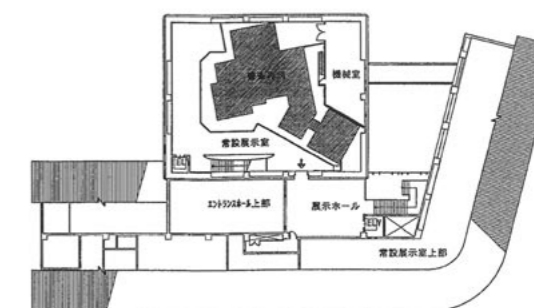
地階平面図



敷地模型



1階平面図



2階平面図

提供：株式会社宮本忠長建築設計事務所

北九州市立松本清張記念館

JR小倉駅から徒歩15分。JR西小倉駅から徒歩5分。



計画概要

所在地：福岡県北九州市小倉北区城内2-3
 建築主：北九州市
 設計者：株式会社宮本忠長建築設計事務所
 施工者：株式会社松村組、株式会社森組
 竣工：1998年6月
 敷地面積：2,800㎡
 建築面積：1,583.50㎡
 延床面積：3,391.69㎡